

3

けいれん

けいれん発作の見た目は衝撃的で、初めて目の当たりにされた保護者は「死んでしまうかも」と思ってパニックになることも珍しくありません。動揺するのは仕方ありませんが、けいれんについて知識をもっていると、ある程度は落ちついて対応できると思われます。

子どものけいれんで最も多いのは熱性けいれんです。12～13人に1人の子どもが経験します。子どもの脳は熱にびんかんで、咽頭炎などの熱でけいれん発作を起こすことがあります。生後6か月から5歳頃までの乳幼児期に、通常38℃以上の発熱に伴って起こります。熱の上がり際に起こりやすく、突然意識がなくなり、白目をむいて、体をのけぞらせて手足を硬直させ、手足をガクガクふるわせ、顔色が悪くなります。

熱性けいれんの多くは、5分以内に治まります。けいれんが起きたら、安全な場所で横に寝かせましょう。吐くこともありますので、顔や体を横へ向けて吐物で窒息しないようにしましょう。はしや指を口の中に入れてはいけません。可能なら発作が起こった時刻や続いた時間、けいれん中の様子を記録しておく、後で役に立ちます。けいれんが5分以上続

く場合は、救急車を呼びましょう。

はじめて熱性けいれんを起こした場合に、再び熱性けいれんを起こす子どもは3分の1くらいです。熱性けいれんをくり返しやすき子どもでは、予防のために発熱時にけいれん予防の座薬を使うことがあります。ただし3分の2の子どもでは再発がありませんので、多くの子どもでは薬は必要ないことを知っておきましょう。

熱性けいれんで大事なことは、髄膜炎や急性脳症など熱性けいれん以外の重い病気と区別することです。けいれんをくりかえす、おう吐や頭痛が強い、意識がはっきりしない状態が続く、などの場合は要注意です。

予防接種についてですが、熱性けいれんの既往がある子どもも受けられます。ワクチン接種が遅れることにより重症な感染症に罹患する可能性がありますので、積極的な接種がすすめられます。かかりつけの小児科医に相談しながら予防接種を受けてください。

